「世界宗教」というカテゴリーの 系譜を描く

の思想の根拠となる普遍性の基盤を模索

小原克博

世界宗教の発明

ヨーロッパ普遍主義と多元主義の首談

う言葉や、そとに含まれる宗

繰り返されている、西欧世界 を強調する。たとえば、今も よく、対象との類似性や相違

における反イスラーム的な感

る本書は、一世界宗教」とい まで)を描くことを目的とす

教一覧が近代ヨーロッパの中

糸譜は宗教の研究者の間のマ 葉だけにとらわれると、その かにしている。宗教という言 で「発明」されたことを明ら

一アックな議論ではないかと

精緻に構成された言説の歴史

史的には明らかであるが、そ

セム的な起源を持つことは歴

(同志社大学教授)

の連続性よりも、ギリシア的

されている)。キリスト教が

リカの政治事情の中から形成

との必要性を本書は促してく

という新たな結合表現はアメ

った(「ユダヤ=キリスト教 セム語族に結びつけられてい

だけでなく、世界史的な文脈 されるのかを、日本史的文脈

においても批判的に考えるこ

ことのできる深い根を持ち、 少なくとも数世紀さかのぼる 発的に現れたものではなく、 情や表現は、9・11以降に突

があることを本書は教えてく

として19世紀から20世紀前半 というカテゴリーの系譜(主 ちの思い込みであることに気

しかし本書は、それが私た

づかせてくれる。「世界宗教

ることによって、未知の対象

をわかったつもりになる。そ

その反動を受けるかのよう

う点が少なくない。そして、

た近代日本の営みにも響き合 アイデンティティ形成を行っ 統と近代的合理性のはざまで 近代の知的営為は、宗教的伝

に、一神教トリオは解体され、

れるようになった。そして、

キリスト教はアーリア語族

に、ユダヤ教とイスラームは

今も日本社会において繰り返

った安直な対立図式が、なぜ

「一神教」対「多神教」とい

して多くの場合、自分に都合

ある。人間は誰しも、分類す

いかに難しいかということで

ア語族に属する仏教がキリス が発見され、同時に、アーリ

ト教に並ぶ世界宗教と見なさ

か、と考えてもおかしくはな わめて平等で現代的ではない

我々が世界をありのままに見

(インド=ヨーロッパ語族) セム語族とアーリア語族

たり、表現したりすることが、

教が列挙されているのは、き く、世界各地にある複数の宗

築が伴っていた。本書を通じ 洋的アイデンティティの再構

あった。

学、すなわち、比較言語学で 作ったのは、新しい言語の科

とに満足しているだけでは、

ことを本書は示唆している。 なお十分ではない何かがある

本書が描き出すヨーロッパ

て強く感じさせられるのは、

数の「大」宗教だけではな 受け継がれている。限られた で急速に一般化し、そのリス ストは、1920年代の北米 こうした世界の主要宗教のリ

トがほとんど変わらずに今に

生成には、多様な宗教の分類

代となった。そのきっかけを たなカテゴリーを模索する時

キリスト教的残滓を執拗に抹

ロギーへと向けられていく。 主義とも言える西洋的イデオ 批判的視線は、多元的な普遍 変化なのであろうか。著者の からの解放として祝福すべき

消し、多元主義を称揚すると

「世界宗教」という言葉の

と類比の試みだけでなく、西

の本が次々と出版され、また、 世界の宗教について学ぶため

らの普遍性をどのように維持 合う中で、西洋人たちは、 膨大な多様性と否応なく向き 代以降、非西洋世界における いう言葉に示されている。近 遍主義と多元主義の言説」と 副題にもある「ヨーロッパ普

現代の日本社会においても、

教的異教とは一線を画する存

オは、その他もろもろの多袖 たとはいえ、この一神教トリ

在として、一体性(普遍性)

いく。それはかつてあったヨ せる多元主義的言説が生じて 数個の世界の諸宗教を共存さ

・ロッパ中心主義・覇権主義

かれることはあるにしても、 るかの細部に関して意見が分

多くの大学で世界の諸宗教を

学ぶ授業が用意されている。

り組むことになった。西洋社 できるのか、という難問に取

遍性の基盤が模索されたので 会やその思想の根拠となる普

ころが、この四分法が19世紀 たことは言うまでもない。と 性の中心基盤と見なされてい の場合も、キリスト教が普遍 を有していた。もちろん、そ

前半には衰退し、19世紀は新

秋山淑子•中村圭志 訳

みすず書房

神道等々である。どの宗教を

世界宗教」のリストに入れ

增澤知子 著

世界宗教の発明 ッパ普遍主義と多元主義の言説

の宗教を並列的に思い浮かべ

定した構造をもつ、いくつか は、信者数が多く、比較的安

の思想の中にどのように位置

ることだろう。キリスト教、

ヨーロッパ人のアイデンティ づけ、再定義するかは、近代

キリスト教、ユダヤ教、マホ 返し用いられてきた。それは 語る四つのカテゴリーが繰り で、世界の諸民族(宗教)を

学に依拠した反セム主義が、 学の副産物の一つである、科 であった。そして、比較言語

メット教(イスラーム)、そ

仏教、イスラーム、ヒンドゥ

、ユダヤ教、儒教、道教、

り、そのポイントは、本書の ティに直接かかわる問題であ

の他(偶像崇拝、異教、多神

対する差別的な言説を生み出

した。それがさらに何をもた

ユダヤ教およびイスラームに

教)であり、三つの一神教の

間にすでに様々な軋轢があっ

らしたかについては歴史が教

える通りである。

このような経緯を経て、十

葉を耳にしたとき、多くの人

より、はるかに広い。キリス

17世紀から19世紀の前半ま

な普遍性獲得の道を選んだの

一化することによって、新た

アーリア的な特性に自己同

本書が示している射程はそれ

ト教や他の宗教をヨーロッパ

今日「世界宗教」という言

A 5 判504頁 本体6800円